

ヤクザのおじさんに執着されて、ペットになりました
ゝ 騃 という名の溺愛トロトロ交尾セックスに絆されるお話ゝ

「来ちゃった♡」

「龍哉さん……」

アパートの部屋の前で、ヤンキー座りをしている男性を見下ろす。

推定四〇代、やたらと整った顔、派手な柄シャツ、スラックス、無精ヒゲ、スハーフアップ。

見た目を羅列すれば「明らかに反社」に他ならないが、私はこの人と週に一回のペースで会っている。

というか、週に一回のペースで待ち伏せされている。

「そろそろ警察呼びますよ」

「つれないこと言わないでよ利香ちゃん、俺まだ君に全然恩返しできてないのに」

「十分していただきました。これ以上は過失です」

「お札に過失とかある？」

私の言葉に龍哉さんはケラケラ笑った。そして、そばに置いてあったビニール

袋を掲げる。

「でも、お腹空いてない？　今日は餃子作ってきました」

「……！」

ごくりと唾を飲み込む。餃子。

朝から機嫌の悪いお局をいなしながら、やたらと忙しい金曜日を乗り切ったのだ。

これに、ビールを、ぐいっとできたら。

「ビールもありまあす」

負けた。

疲労と食欲に負けた私は、こうして今日もまた彼を部屋に入れてしまったのだった。



事の発端は、二ヶ月前にアパートの階段で血まみれの龍哉さんを見つけたことからだった。

帰り道、パトカーの音がずっと鳴り響いていた。チカチカする赤色灯を眺めながら「何かあったんだろうか」とぼんやり思っていたけれど、多分、この人が関係しているのだろう。直感的にそう思った。

「やあ、こんばんは」

龍哉さんは、虚ろな目で私に挨拶をした。恐らく、威嚇のようなものだったのだろう。目だけで「早くここから立ち去れ」と言われているように感じた。

しかしながら、頭部と左腕からの出血、無数の打撲や切り傷を見てしまつては、恐怖など感じる暇もない。看護師として、放っておけないと思つた。

一度部屋に戻つて救急箱を用意し、彼の元へ戻つた。彼は、私の姿に目を見開いて「マジ？」と笑つた。

「マジです。看護師なんで」

「うら若き女性がこんな悪い男に関わるもんじゃないよ。見ての通り、ちゃんとした社会で生きてないよ？ おじさん」

「だからって怪我人を無視できません。それができてたら、私は看護師になつてませんよ」

「……馬鹿な子だねえ」

「通報されたいんですか？」

「いやいや、とんでもない。ありがとう。惚れちゃう」

「そういうのはいいです。そもそも、職場にもあなたみたいな人は山ほどやってくるので」

「なるほど、慣れてんのね」

軽い手当をしながら、少しでも話をした。

彼は龍哉と名乗り、「ちょっとした喧嘩に巻き込まれている」と言う。

「ちょっとした喧嘩……」

「巷では抗争とも言ふね」

「早く帰りたいです」

「正直者お」

「でも……」

「ん？」

龍哉さんの出血箇所を目を向ける。思ったよりも深く、このまま手当をするには少し怖さがあつた。

「頭と腕の傷……は、さすがに一度洗つた方がいいかなつて」

「部屋に入れてくれんの？」

「……」

にやりと試すように笑われ、少し嫌な気持ちになった。「さすがにそれはできないでしょ？」みたいな、意地悪な顔。

（……でも、もう乗りかかった船だし）

やってやろうじゃないか。看護師舐めんなよ、意地の悪いお局に何年揉まれてきたと思ってるんだ。

「流すのだけ、うちでやりましょう」

「いやいやいや、マジ？ 俺が言うのもなんだけど、大丈夫？ 意外とワンナイトとか慣れてんの？ おじさんそういうの感心しないよ、自分を大切にしな」

「本当にあなたが言えることじゃないですね。嫌ならいいですよ、このまま何かしらの菌に冒されて腕を切り落とすようなことにならなきやいいですけど」

「え？ そんなにヤバいの？ これ」

「傷口からの感染は気をつけた方が良いです。そういうナイフって、消毒してないでしょう？」

「してたらヤクザしてないね。あ、言っちゃった」

「言っちゃいましたね」

「えー、でもなあ」

「そうやって迷ってくれるなら私にとつては『家にいてもいい人』です。大丈夫です、一一〇の画面ずっと出しとくんぞ」

言ってる自分でも、変な交渉だなあと思った。でも、どうしても目の前の男性が悪い人のように思えなかった。

私がスマホを見せると、龍哉さんはへらりと笑う。

「うん、それがいい」

職場でも思う。結構、こういう界限の人の方が優しかったりするよなあ。お局も見習ってほしいものだ。



それ以来、龍哉さんは毎週「この前のお礼に」と食事を差し入れてくれるようになった。彼は意外にも料理が得意らしく、毎回とてもないクオリティの食事を提供してくれる。

一人暮らしをしていると、他人の作ったご飯が本当に美味しい。龍哉さんの緩い会話にも絆され、私は何だかんだと毎週彼を家に入れてしまっていた。

「仕事の方はどう？」

「親戚のおじさん？」

「まあ間違いないおじさんですよ」

二人で餃子とビールを食らい、テレビを見ながら雑談をした。

龍哉さんを家に入れてしまうのは、こういうおじさんムーブが多いからでもあるだろう。

彼から性的な目で見られていると感じる瞬間が、一度もない。それはそれで自分の色気のなさに少し落ち込むが、関係性としては好ましいものだった。

「今日もお局が一人でブチ切れてました」

「更年期ってやつかねえ」

「でも昔からああらしいんですよ。よくあんなに切れられるなあって思います」
「溜め込んでるんだろなあ。そういうやつはそのうち大概自滅するよ」

「するなら早くしてほしいです」

「辛辣う」

「本当に転職しようかなあ」

「看護師辞めるの？」

「んーそれも迷ってます。新しい病院探すか、他の職業やるか。でも今更、他の職業できる気もしないし……」

「じゃあ、俺に飼われる？」

かわれる？ 買われる？ 代われる？ あ、飼われるか。

一瞬どういう意味か分からず、きょとんと龍哉さんを見てしまった。龍哉さんはへらりと笑っている。いつもと同じ笑みだった。

だから、冗談だと思った。

「それもいいかもですね」

だから、安易にそう答えてしまった。

次の週、龍哉さんは来なかった。

連絡先の交換をしていないから、理由なんて知りようもない。そもそもお返しはもう十分だったのだ。

お別れもなくあっさり終わってしまったのは少し寂しいけれど、そういうものだろうと割り切った。



（あゝゝゝ無理！　なんだよあのクソババア！　更年期なら漢方でも飲んでろ！
何であんな言い方されないといけないんだよクソが！　あゝゝあ！　マジで！
マジで！　マジで転職しようかな……）

龍哉さんが来なかった週の翌週、帰り道のことだった。

お局の嫌味が頭の中でリフレインしては、怒りが湧き上がって涙が零れそうになる。やるせなくて、恥ずかしくて、情けない。

転職、転職、転職、と脳内がその単語だけで埋め尽くされながら歩みを進める。すると不意に、聞き覚えのある声に名前を呼ばれた。

「利香ちゃん」

思わず振り向くと、そこには龍哉さんが立っている。相変わらず派手な柄シャツを着た彼の横には、黒塗りの高級そうな車が停まっている。

街灯に照らされる龍哉さんの顔には濃い影が落ちて、掘りの深さが際立っていた。

「龍哉さん……」

「久しぶり」

「びつくりしました。もう鶴の恩返しは終わったのかと」

「うん、これからは桃太郎かな」

「はい？」

「きび団子あげるから、おいで」

「え？」

戸惑っていたら腕を引かれ、あつという間に車に押し込められてしまった。煙草のにおいがする車内には、ラジオも音楽も流れていない。エンジン音と革張りのシートの冷たさに少し怖くなり、龍哉さんに声を掛けた。

「あの、龍哉さん」

「ごめんね、結構準備に時間がかかったちゃってさ」

「準備って……」

「いい部屋が用意できたから、楽しみにしてていいよ」

「え、あの、龍哉さ……っ」

怖い。怖い。怖い。

話を通じていない気がする。あんなに温和で、気の良い『おじさん』だったはずなのに、今日の彼はどこかおかしいと思った。

「今日から俺が、利香ちゃんの飼い主だよ」



「ほら、どう？」

龍哉さんの異様な雰囲気^{きふき}に気圧され、あれよあれよとタワーマンションに連れ込まれてしまった。

モデルルームのように綺麗な部屋だった。広いリビング、カーテンのいらぬ大きな窓ガラス、高級感溢れるオーブンキッチン。私の月給では、到底借りられそうもない絢爛^{けんらん}さだ。

「どうって……」

「せつかくだからいいところ借りちゃった。こういうことでもない^{ない}と金も使わないしね」

「えっと、龍哉さん……。その、この前の飼うって話、もしかして本気に……」

「もちろん本気だよ？」

「！」

恐る恐る聞いてみたが、返ってきた眼差しにまた恐怖が襲ってきて言葉が発せなくなつた。

龍哉さんじゃないみたいだ。でも、正真正銘、龍哉さんだ。

言っていることは怖いのに、車から降りるときもエスコートしてくれたし、私を思いやってずっと声を掛けてくれている。……のに、何で、こんなこと。

「ちゃんとして録音してるし」

龍哉さんは穏やかに言うと、スマホをついつと触つて、画面をタップした。先日の会話が、高層階の静けさを孕んだ室内で繰り返される。

「俺に飼われる？」「それもいいかもですね」。

確かに言つた。言つただけ……。

「で、でもこんなの、おかしいですよ」

「おかしくないよ。口約束だろうが、ヤクザに飼われるの了承しちゃったからね。利香ちゃん自身が」

「ただの冗談……っ」

「ヤクザにそれが通用したら、警察いらなくなっちゃうからね」
「……！」

咄嗟にポケットのスマホに手を当てた。一一〇番。

そうやってスマホに縋る私を見て、龍哉さんはふふつと笑う。

「警察呼ぶ？ やめてほしいなあ」

「だ、だってこんなの……！」

「そんなもんだよ、俺たちの世界は」

「龍哉さん、おかしい、いつもの龍哉さんじゃ……」

「あれも俺だし、これも俺。もしかして、利香ちゃんの職場に来る同業にも『優しい』なんて思ってた？ そう振る舞うに決まってるじゃない。警戒されてるの分かってんだから、こっちは」

「そんな……！」

「馬鹿な子だねえ」

初めて会ったときも、同じことを言われたような気がする。善意でやったことが、どうしてこんなことに。

固まる私に龍哉さんが近付く。そしてスツと私のポケットからスマホを取り出すと、それをキッチンへ持って行った。

「龍哉さ、」

龍哉さんは私の声を見捨て、キッチンにあるお鍋に水を溜めた。半分以上水が溜まると、そこに向かってスマホを落とす。

ボチャンッ

「！」

「しばらく浸けとこうね」

「……っ」

料理をしているようにそう言った龍哉さんは、こちらに戻ってくると優しく私の手を引いた。

「ま、ちょっとゆつくりしようよ。お仕事お疲れ様」

逆らえず、一緒にソファに腰掛ける。高級そうな黒の革張りのソファが、ぎしりと嫌な音を立てた。

「やあっと、俺の物になるね」

「た、龍哉さん……」

「ん？」

「ご、ごめんなさい、私、こんなことになるなんて思ってた……っ」

「怖がらなくていいよ。利香ちゃんは今から何も心配しなくていいんだから。

仕事も行かなくていいし、お金のことも気にしないでいい。ここで俺の帰りを待ってくれるだけでいいんだ」

「何で……っ」

「何でって、利香ちゃんのことを大好きだから意外にないでしょ。あんなに優しくされて惚れない男はいないよ。まあ、これから利香ちゃんに惚れる男がいようもんなら一人残らず消すけどさ」

「……！」

「ああごめん、また怖がらせちゃったね」

私の表情を見た龍哉さんは、落ち着かせるように私の肩を抱き寄せた。そして、額にちゅっとキスをする。

怖い。怖いけど、何だろうか。どうしてこんなに、変に、ドキドキしてしまってるんだろうか。

龍哉さんの声とキスが、いつも以上に優しいからだろうか。

「俺はね、利香ちゃんみたいな子には幸せになってほしいのよ。これはお互いのためでもあるんだからさ、もう委ねちゃってよ」

「でも……っ」

「でも？ 何か困ることあるかなあ。利香ちゃんは嫌な仕事を辞められる、生活にも困らない、俺も利香ちゃんがいたらハッピー。ウィンウィンじゃない？」

首を傾げて龍哉さんが聞いてくる。大きくて無骨な手が私の荒れた手をぎゅつと握り、今度は頬にキスをされた。

「何も考えないで、全部俺に任せてよ」

ちゅ、とついに唇にキスをされる。煙草のにおいがして、少しぼうつとしてしまった。

でも、こんなので、やっぱり……。

「だめだよ、龍哉さん……」

「強情お」

「だって……」

「利香ちゃんクソ真面目だからなあ。一回、おじさんとダメになっちゃおうか」
「え？」

龍哉さんに強引に押し倒され、気づけば龍哉さんが私に跨がっていた。両手首

を龍哉さんの大きな手で拘束され、抵抗ができない。

「た、つやさんっ」

「大丈夫」

「あっ……」

龍哉さんの指が、私のブラウスのボタンを上から一つ一つ外していく。布が擦れる音がイヤに耳について、恥ずかしさがこみ上げた。

「やめ……っ」

「大丈夫大丈夫」

私を落ち着かせるように言い、器用に全てのボタンを外した龍哉さんはそのまま流れるようにブラのホックを外した。

彼はブラを少し上に動かすと、私の乳房を見て「可愛い乳首だねえ」と言う。一瞬で顔が熱くなってしまい、抵抗をしたくても小さな声しかでなかった。

「龍哉さん……!」

「カリカリしちやおうか」

「あッ♡」

「可愛い声出たねえ。利香ちゃん、乳首好きなの？ いっぱい触ってあげようね」

「や、だめっ……♡ あ、んッ♡」

「乳輪さわわしたら、あつという間に固くなっちゃったねえ。ほぐしてあげよう」

「ひゃあッ♡」

こりっ♡　ぐりぐりっ♡

龍哉さんの太い指が、私の小さな乳首をぐりぐり♡とこねる。その快感に声を上げてしまうと、龍哉さんは「こっちは舌でほぐしてあげるね」ともう一方の乳首をべろり♡と舐めあげた。舌の先でちろちろ♡と遊ばれたり、ぐりぐり♡と押しつぶされると下着がどんどん湿っていき、隠すように太ももを閉じる。

「んんっ♡ あ、だめえ……っ♡　ぐりぐりしないでえっ♡」

「なあんて可愛い乳首なんだ。おじさん、こういう素直な乳首見ると虐めたくなっ

ちやうよ」

「ああッ♡ それっ、あ、やあ……っ♡」

「つねられて興奮してんの？ 利香ちゃんったら真面目な顔してどスケベなんだから。悪い子にはお仕置きしないとねえ」

「あ、んあっ……♡ やっ、それっ、甘く噛んじやらめえッ♡ 噛みながら、あッ♡ べろべろしないれえっ♡」

「お仕置きされて喜んでちゃダメだよ、利香ちゃん。もっとお仕置きしなきゃいけないなっちやう」

いつの間にか龍哉さんに掴まれていた手首は解放されていた。それに気づいたと同時に、龍哉さんの指が私の中にぬるり♡と入ってくる。

「あッ♡」

「あーこれはダメだ。どうしてこんなに濡れてるの？ おじさんに乳首お仕置きされて、どうしてこんなにとろとろになっちゃったのかなあ、悪い子だなあ利香ちゃん」

「ん……ッ♡ あ、んっ、ああっ……♡」

ぐちゅぐちゅ♡　ちゅぽちゅぽ♡

乳首を舐められながら、龍哉さんの太い指が私の中を行ったり来たりする。Gスポットを擦られ、腰を浮かせると龍哉さんは叱るようにぢゅうつ♡と私の乳首を吸った。またビクンと腰が跳ねる。

やばい、やばい、龍哉さんの指、気持ちいい。太くて、熱くて、固いの柔らかくて、私のイイところを的確に、優しく、いやらしく責めてくる。

「さっきまでダメダメ言ってたのに、もう蕩けた顔しちゃって可愛いんだから。おじさんの指、気持ちいい？　いーっぱい気持ちよくしてあげるからね」

「んあッ……♡　あ、やあッ♡　龍哉さん、ゆび、ふと……♡　らめえッ♡」

「太いのが好き？　いやらしいねえ。おじさんのちんぽはもつと太いからね、たっくさん慣らさないと」

「んう……ッ♡」

「あ、締まった。想像した？　想像したら子宮がきゅんってなっちゃったの？　スケベな利香ちゃんかーわいい」

「あっ♡　あ、んッ♡　ご、ごめんなさ……♡　そこ、らめ、龍哉さん♡」

そこちゅこちゅしないでえっ♡」

「うんうん、いーっぱいこちゅこちゅ♡ってしようねえ。ほら、足広げて」

「おあっ……♡」

こちゅこちゅ♡　ぐじゅっ♡　じゅぼっ♡

龍哉さんに足を広がられ、あられもない姿で喘がされた。太い指は私の最奥をこっんこっん♡かりかり♡と刺激し、そのたびに足の指まで電撃が走る。

「やあ……っ♡　た、たつやさ……っ、らめ、あっ、お♡」

「もうイっちゃうの？　おじさんの指一本で？　可愛い雑魚まんこだね、利香ちゃん。奥の方こっこっ♡したらすーぐビクビク♡ってしちゃうんだから」

「ごめんなさっ♡　いっ♡　イ、イっちゃう、だめッ♡　龍哉さんの指だけでっ、い、イっちゃ……っ♡」

「乳首と手マンだけで蕩けちゃってごめんなさいは？　ごめんなさいが言えたら奥の方いっぱいぐちゅぐちゅしてあげるよ」

「ご、ごめんっなさい……ッ♡　ちくびと、手マンでっ♡　とろけちゃってます♡♡　ら、らめって、言ってたのにつ、どスケベでごめんなさいいっ♡」

「よく言えました♡」

ずちゅッずちゅッずちゅッずちゅッ♡♡

「おあッ♡ あ、やつ、んんっ♡ しゅ、しゅご……っ♡ あ、あつ、あ……
……ッ♡」

龍哉さんの中指と薬指が、私の中に入って来て膣壁のイイところを全て撫でていく。トロトロの愛液を纏いながら、彼の指はぬちゅぬちゅっ♡と卑猥な音を立てた。

「雑魚まんこの利香ちゃん、腰へこへこでかーわいい。こちゅこちゅ気持ちいいねえ」

「気持ちいいッ……♡ お、あ、やつ……♡ きちやうつ、いつちやう、あ、あッ♡」

「いい顔♡ 俺の手に縋り付いちやうて可愛い。ほらはら、イっていいんだよ」
「あ……ッ♡ イくっ♡ イっちやうっ♡ たつやさ、あ、あつ、んん……」

くくあツツ♡　くくくツ♡」

イイところを責め立てられ、頂点まで達した快楽で私の腰は大きく弓なりになった。ずるんっ♡と龍哉さんの指が抜け、龍哉さんはその指をべろりと舐める。

「あつま♡ 利香ちゃんのお汁、美味しいね」

「はあ……っ♡ はあ……っ♡」

「直にいただこうかな」

「ちよ、まつ」

予想はしていたけれど、予想通り龍哉さんは私のおまんこに顔を埋めた。私の足を大きく広げ、おまんこを間近で眺めながら「きれいな色♡」と感想を言う。

「ひくひくしてるねえ♡」

ぺろっ♡

「あっ♡」

「クリトリス舐めるのと舌入れるの、どっちが好き？」

「そ、そんなの……っ」

「ここまで来て抵抗する？　こーんなにとろとろ♡させちゃって……」

っんっ♡

からかうように龍哉さんは私のクリトリスを舌で弾いた。たったそれだけなのに快感に身体が震え、子宮は何かを待っているようにきゅう♡と収縮する。

「利香ちゃんのおまんこ、いっぱい舐めたいなあ。クリトリスぺろぺろ♡して、中に舌入れてぬこぬこ♡して、ぢゅうぢゅう♡吸って、かみかみ♡して、ぐっちよぐちよ♡にしてあげたいなあ」
「あ……っ♡　んう……ッ♡」

ちゅ♡　ちゅ♡　ぺろっ♡

焦らすように龍哉さんは私のクリトリスにキスをして、少しだけ舌で刺激して

くる。甘くて弱い快感に私のおまんこはずくずく♡と疼いて止まらない。

でも、こんなの………っ。

「あ、そっか。でも俺、利香ちゃんの飼い主なんだった」

「え？」

「だから俺の好きにしちやうね」

「あ、まっ……あっ♡ あ、んっ、おっ♡ や、だめっ♡ あ、んっ♡」

ぢゅうううううっ♡ ぢゅぢゅっ♡ ぬこっ♡

何も言っていないのに勝手に納得した龍哉さんは、私のおまんこを引き寄せてクリトリスを吸い上げ、噛み、舌で膣壁をぬこぬこ♡と可愛がった。太ももをがっしり固定されて逃げようがない快楽に、腰がどうしても跳ね上がる。

「んっ♡ 可愛い雑魚まんこ♡ ぐっちゅぐちゅに鳴っちゃってだらしないねえ」

「やっ……♡ んあっ♡ やらあッ♡ クリ吸わないでえっ……♡」

「そんなこと言っても利香ちゃんのクリは早く舐めて、吸ってって大きくなってるよ？ んー可愛いねえ♡ ちゅっ♡ ぢゅううっ♡」

「おあッ♡ らめ、あっ、んんッ♡ またイっちやうっ♡」

「イっちやう？ クリも好き？ どスケベ。可愛いどスケベは乳首も一緒に虐めてあげようね」

「あゝッ♡ ぶあっ♡ しゅごっ♡ イっちやう、あっ、お♡」

龍哉さんの指は私の乳首をぐりぐり♡をつまみ、舌はクリトリスを弄びながら時折ぢゅうっ♡と吸った。乳首もおまんこも龍哉さんの愛撫に絆され、イクことしか考えられなくなってしまう。

「イクっ♡ イっちやうっ♡ あ、あッ♡ 龍哉さん……いつ、ちやう……っ♡」

「ん、いいよ。お利口さん」

ぢゅこここっ♡♡ ぢゅううううっ♡♡

「おあっ……♡ あ、んッ♡ あ、あ、イク、イクッ♡ ん♡ っ♡♡♡」

ぎゅう♡と乳首を引っ張られると、その刺激で深くイってしまった。甘い余韻

に浸され、びしょびしょになったおまんこを隠す気力もなくハアハアと息をする。龍哉さんは私の頬を優しく撫でると「いい感じになってきたね」と笑った。

「……」

「そんな顔しないでよ。お風呂入る？」

「えっ？」

「んんん？ お風呂イヤ？」

「！」

やられた。

当然、このあとは挿入がやってくると思っていた。龍哉さんはそれが分かっている、わざと「お風呂」にすり替えたのだ。

咄嗟に「えっ？」なんて言ってしまったから、目の前のおじさんはしたり顔でにんまりと笑っている。

「どうしたの？ 利香ちゃん」

いつもの優しい声だった。

あれよあれよとこんなことに連れ込まれ、あれよあれよといやらしいことをされていくというのに、それだけで少し警戒心が取れてしまう。

これが、龍哉さんのやり口なのだろうか。けれど、それでも、龍哉さんは会ったときからずっと優しい。

「……いつか、私を売り飛ばすんですか？」

「ええ？　まさか。人身売買なんて誘拐すれば事足りるんだからさ、こんな手間と金かかることしないよ」

「こわ……」

「そういう社会に生きてるからね。だから、利香ちゃんの優しさが身に染み込んだ。この歳になると、余計にね」

「……」

「疑うなら何か証明しようか。小指詰める？」

「指輪買う？　みたいな気軽さで言わないでください……」

「利香ちゃんのためなら詰めるよって話じゃない」

私が馬鹿だったんだろう。

看護師だからなんて高尚めいたことを掲げて、悪い男に付け込まれた。危機管理能力は高いつもりではいたけど、こんなことになるなんて。

「でも利香ちゃん、この問答必要？」

「え？」

「どうせ君は、もうここから逃げられないんだよ」

龍哉さんはにこやかにそう言った。とても大人一人を監禁するような人間には思えない、優しい顔だ。

ああ、そうだ。馬鹿だったんだ。きっと彼は、私を逃がしてくれないだろう。だったらもう、このまま快樂に身を委ねたっていいんじゃないだろうか。

彼に全てを任せて、もう、この子宮から湧き上がる疼きに逆らわず。

「龍哉さん」

「ん？」

「……もう、諦めます」

「うん、そうだね」

拍子抜けするほど同意されて少しムツとした。けれど、それ以上に身体の火照りが収まらない。

彼にじゅくじゅく♡にされたおまんこが、今か今かと待っていた。

「あの……だから……」

「ん？ だから？」

「……楽しんでる」

「そりやそうでしょ。おじさんに可愛くおねだりしてごらん。なあんでもしてあげちゃうよ」

「……っ」

「ほら、言ってごらん」

「た、龍哉さんの……」

「うん」

「お、おちんぽを……」

「うん」

龍哉さんは私の途切れ途切れの言葉に応えながら、私の足を広げた。反り立ったおちんぼを私のおまんこに向け、入り口をずりゅ♡と擦る。

（本当に太い……ッ♡　すごい重さ……こんな何度も出し入れされたらっ……♡）

「んあッ……♡」

「ごめんねえ、おじさんのちんぼ堪え性がないからさあ。利香ちゃんのおまんこに早く入りたいって疼いちゃってんだよ」

「あ……っ♡　ん……♡」

ぐちゅっ♡　ぬりゅっ♡

割れ目にそって亀頭が上下する。そのたびにおまんこはぱくぱくと反応し、早く入れて欲しくてたまらない腰が勝手に動いてしまった。

「で、なんだっけ？」

「た、龍哉さんのおちんぼ、ください……っ♡」

「どこに？」

「利香のおまんこにっ……♡」

「利香ちゃんのだんなおまんこ？」

「利香の、あっ♡ 龍哉さんにぐちゅぐちゅにされたっ♡ 雑魚まんこに、龍哉さんのおじさんちんぽ♡ ください……っ♡」

「よくできました♡ ご褒美だよ」

ずりゅう……っ♡

「おッ♡」

「これで名実ともに俺のペットだね、利香ちゃん。俺に犯されるところ、よくく見てて」

「あ……っ♡ はあっ……♡」

ずりゅううう……っ♡

龍哉さんのちんぽは、指同様太いし硬い。凶器のようなそれが、私のおまんこ

にゆうつくりと入っていく。まるで侵略してくるように、分からされているように、みちみちイッ♡と私の中を進んでいく。

「見えてる？ 利香ちゃん。ほら、もう少しで根元までいくよ」

「は……ッ♡ あ、んんっ……♡ すご……っ、みちみちって……おっきい……ッ♡」

「すごいねえ、利香ちゃんの中、ぴくぴく♡ってちんぽに喜んでるよ。犯されて嬉しいの？ 悪い男に拐われて、犯されて、おまんこ喜んでやってるの？ どスケベ利香ちゃん」

「あッ♡ い、言わないでえ……んッ♡」

「ほーら、根元まで入る……よっ♡」

「ああ……ッ♡ あ、あ……ッ♡」

ぐぢゅんっ！♡と奥までちんぽをねじ込まれ、あまりの快感に甘イキをしてしまった。みちみち♡と私の中で膨張する龍哉さんのちんぽに、挿入されるだけで膣壁が喜んでしまっている。

「ちょっといった？ 入れただけでイっちゃったの？ 雑魚まんこだねえ」

「ご、ごめんなさ……っ」

「ピストンしちやったらどうなるの？」

「ん……っ♡」

「想像した？ してみようか？」

ぬうっ♡

「あッ……♡」

また、ゆっくりな動きだった。入ってきたときと同じくらいゆっくり抜かれ、そうやって膣壁が擦られるたびにきゅうきゅう♡と子宮が震える。

「これをさあ、一気に奥まで入れたら、利香ちゃん嬉しい？」

「は、はい……っ♡」

「こうかな？♡」

ぐちゅん！♡

「んんあっ♡」

「あーたまんねえなあ、利香ちゃん。腰勝手に動いちゃうよ。ごめんね、おじさんいい歳こいてまだ性欲有り余っててさあ」

とんッ♡ とんッ♡ とんッ♡

身体を密着させられ、足を持ち上げられながら最奥をこつこつ♡とノックされる。指より質量のあるそれで、否応なしに口から嬌声があふれ出た。

「あッ♡ は、んっ、あ♡ あ……ッ♡」

「気持ちいいねえ、こんこん♡ってしたらエッチな声出ちゃうねえ。まだ全然ゆっくりなのに、これから大丈夫？ もっと叩きつけたらどうなっちゃうの？」

「ん♡ あっ、だ、だめえっ……♡ いま、されたらっ、あッ♡ おかしくなっちゃ……ッ♡」

「それフリ？ もっとずこずこ♡してっってこと？」

「ち、ちが……ッ♡ほんとに、だめっ、んッ……お願い、ったつや、さ……っ

お♡

「ん？ ずこずこ♡してほしい？」

「ちがうう……ッん♡ とんとん♡ がっ、あ、いいい……ッ♡」

「とんとん♡がいの？ そっかあ、じゃあおじさんいっっぱいとん♡って
しちやおう♡ ほーら、とんとん♡ 利香ちゃんの一番奥、何回もとん♡し
てあげようね♡」

「あッ♡ おッ♡ らめえ……ッ♡ いっ、いっぱい、ん♡ とんとんしちやら
めえっ……♡」

「利香ちゃんがおねだりしたんでしょ？」

とちゅっ♡ とちゅっ♡ とちゅっ♡

また騙されたような気がしてならない。私からお願したみたいになってるけれど、それに抗議ができるほどの余裕はなかった。

（しゅご……っ♡ 重いッ……♡ 龍哉さんのちんぽ、奥を叩かれたら頭真っ白
になっちゃう……っ♡）

何か言い返そうとする間にこちゅっ♡と奥を突かれ、そうすると頭にあつた言葉が全部「気持ちいい」に変換されてしまう。太くて重たいちゃんぽに膾がぐちよぐちよ♡と乱されるたび、思考の全てを奪われているようだった。

「あー……最高……。利香ちゃん、すっごい顔。おじさんちんぽで蕩けちゃつてるね。いつもしつかりした看護師の利香ちゃんがさあ、ヤクザのおじさんにとんと♡されてトロトロ♡になってるんだよ？ 全人類に見せつけたいね。誰にも見せないけど」

「んうッ♡ い、言わないでっ……。♡ 気持ちっ、よくてッ、あッ♡ ダメえ……うッ……。んあッ♡」

「いいんだよ、ダメになつて。もう利香ちゃんは俺のペットなんだから。愛されて甘やかされて、俺以外とは生きていけなくなるだけでいいの。だからいーっぱいダメになろうね」

「や……。ッ♡ ダメだよおっ……。あッ、あ♡ 龍哉、さッ……。んッ、あ、あ、こんなのッ……。♡」

「利香ちゃん、素質あるよ。もう少し素直になれたらいいね。薬使うのが簡単だけど、そんな無理はさせたくないし、おじさん頑張っちゃうね」

「んえ……っ？♡」

「利香ちゃんをダメにできるまで、ずうっとずこ♡っておまんこ可愛がってあげるからね」

「え、まっ、龍哉さ……っあ、んん♡」

ばちゅっぱちゅっぱちゅ♡

私の腰を両手で引き寄せた龍哉さんは、そこから一気にピストンの速度を上げた。お尻が浮き上がる体勢になり、逃げ場がないままちんぽをどちゅ♡どちゅ♡と叩きつけられる。

「おあ♡♡ は……ッあ、んう、だ、だめ♡♡ ん♡♡ お♡♡ だめ、らめ、ら、めえ♡♡」

「ダメでいーの。諦めたんでしょ？ もう俺の愛ゼーんぶ受け止める気になったんでしょ？」

「ん♡♡ あ、お♡♡ は、ッ、ご、ごめんなさ……っ♡」

「謝らなくていいんだよ。利香ちゃんは俺にどろっどろに甘やかされて、ぐっちやぐっちにされて、最期の瞬間まで俺に縋ってりやそれでいーの」

どちゅつどちゅつどちゅつ♡

甘い言葉を掛けられながら膾炙を力一杯突かれて、頭が馬鹿になりそうだった。本当なら仕事のこととか、将来のこととか、考えないといけないことがあるだろうに、もう龍哉さんから押しつけられる快樂のことしか考えられない。

（気持ちいい♡　すごい♡　龍哉さんの極太ちゃんぽにオナホ扱いされちゃってる♡　もうこのまま龍哉さんのちゃんぽに分からされて、ダメなどスケベまんこになっちゃうんだ……♡　だめ、極太ちゃんぽに抗えない……♡）

「俺のちゃんぽにきゅうきゅう縋ってきてるね、利香ちゃん。イキそうなの？」

「おっ♡　お……♡　あ、やつ、んうっ、いつ、ぐっ♡　た、つやさ、っ、あっ♡　も、いつちや、うっ……ああっ♡」

「おっきいアクメかましちやおうね。ダメになっちゃおうね。利香ちゃんはどう俺のペットなんだよ」

「んああ♡　きちやうっ♡　おっきいの、あっ、やっ♡」

ごぢゅッごぢゅッごぢゅッ♡♡

「あーいいよ。利香ちゃん、おじさんのちんぽでダメになって。いっぱいイッて。全部愛してるよ」

「おッッ♡」

奥を分からされながら愛を囁かれた瞬間、子宮がきゅん♡と締まったのが自分でも分かった。それと同時に快感が急激に高まり、龍哉さんのちんぽをきゅうきゅう♡と締め上げてしまう。

「んッ、あッ……くっ……♡」

「あー締まった♡可愛い、可愛い利香ちゃん、イッて、アクメして」

「イクッ……♡ん、あ、イっちゃう……♡♡イク……♡あッ……あ、あ、あ……♡♡」

「ん……っ♡」

きゅう……ッ♡

腰を大きく震わせながらビクビクビクッ♡とイッてしまうと、私の締め付けに龍哉さんが少し喘いだ。じゅんじゅん♡と余韻が響く膣から、龍哉さんのちんぽがずるりっ♡と抜かれる。

「っはあ……はあ……っ♡」

「危ない危ない。搾り取られちゃうところだったよ」

龍哉さんは言いながら私をごろんとうつ伏せにし、お腹の方に手を添えた。

いつの間にか龍哉さんも裸になっていて、肩から上腕にかけての刺青に初めて気づく。

（刺青……本当にヤクザだ……）

まとまらない頭でそんなことを考えていると、お腹に添えられた手にぐいっと力を入れられ、龍哉さんにお尻を突き出すポーズになってしまう。

「交尾ならこうしないとね」

「え、ま、待って龍哉さん……っ」

「ペットが何か言ってるなあ」

「ちよ、あ……っ、あ、おあ……ッッ♡」

ちゅこんッ♡

愛液でびちやびちやになったおまんこに、後ろから突かれて情けない声が出てしまった。さつきとは違うところに当たって、知らない快感によだれが出てしまった。

（だ、だめ……♡ 後ろからだともっと太く感じる……っ♡）

「入れただけでビクビク♡ってなっちゃってかーわいい」

「龍哉さん、ダメ、本当にダメ、まだ動かないで……っ♡」

「ペットなのに飼い主に指図するの？」

「おッッ♡」

ぐちゅんっ♡♡

躑をするみたいに最奥にねじり込まれ、目の前が一瞬白くなる。

「ご、ごめんなさい……ッ♡」

「謝らなくていいったら」

「ん♡」

龍哉さんは私の顎を掴んで後ろを向かせ、慰めるようにキスをする。

愛されていると思わされたり、ペットだと思わされたり、どうしたらいいんだと少し混乱した。でも、その混乱さえすぐに『気持ちいい』に支配されるからもう私は立派なペットなのかもしれない。

「は……っ♡ んあ……♡ んむ……ッん♡」

「あゝ、かわいい」

「あッ……♡」

ぐりゅぐりゅ♡

龍哉さんは舌で私の口内を愉しみながら、入れたままのちんぽをぐりぐり♡と

押しつけた。硬くて太いそれに、また膣が狭まる。

「イイとこ当たってるの？ きゅう♡って俺のちんぽに抱きついてきてるよ」

「やあ……っ♡ ちんぽすごいッ、あっ、んんッ……動いちやらめえ……ッ♡」

「俺が動いちやダメなら、利香ちゃんが動こうか」

「え……っ」

「ほら、早く。ペットでしょ」

「んッ♡」

龍哉さんの手が優しく私のお腹を撫でる。

確かに、激しく動かれるのは正直怖い。どうにかなってしまいそうだ。そう思っ
て四つん這いのまま、龍哉さんのちんぽに向かってゆっくり腰を動かした。

「は……ッ♡ あ……、んっ……♡」

「あーエロ。利香ちゃんエロすぎ」

「んんっ……♡」

ずろっ♡ ずろろろ♡

ゆっくりでも、龍哉さんのちんぽの太さは変わらない。膣のイイところをずっと擦られて、ちゃんとオナニーしているようだった。

（気持ちいい……♡ もっと欲しい……っ♡）

ずりゅ♡ ずりゅっ♡

「ちよつと速くなったね。もっと気持ちよくなりたくなつたの？ 俺のちんぽでオナニーして気持ちいい？」

「ん……っ♡ き、気持ちいいです……ッあん♡」

「エッロ……。利香ちゃんが俺のちんぽでオナニーしてる、あのしつかり者の利香ちゃんが、ビニール袋全部綺麗にたんだる利香ちゃんが」

「んあ……ッ♡ な、なんですかそれ……はッ、っあ♡」

「でも俺にはちよつと刺激が強すぎるなあ。こんなの見せられちゃったら堪え性がないおじさんちんぽ、勝手に動いちゃうよ。ごめんね」

「え？ あ、んあッ♡♡」

ぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッ♡♡

龍哉さんは謝罪と共に私の腰を掴み、後ろから極太ちんぽで貫いてきた。その衝撃でまたよだれが口の端から滴り、視界の端からはぱちぱちと視界の端から白い星が飛んでいく。

「おおあッ♡ らめえッ♡ おっ、んッ、ん♡ しゅごッ♡ ツお♡ ツお♡」

「バックが好きなんだ？ 交尾が好きなんてホント利香ちゃんは素質があるよ。俺好みのペットだ。まあ、元々全部好きだったんだけどね」

「んッ♡ ああッ♡ らめッ♡ らめッ♡ おかしくなるッ♡」

「おかしくなるうよ。お漏らししたっていいんだよ、処理も飼主の務めなんだからさ」

「ああッ……♡ ん、んッ♡ しゅごい、しゅごいッ♡」

「しゅごいねえ、気持ちいいねえ」

ぱちゅっ♡ ぱちゅっ♡ ぱちゅっ♡

私の脛を蹂躪しながら、龍哉さんはちゅっ♡ちゅっ♡と私の背中にキスをした。

甘い痛みも孕んだそれに、殊更子宮が反応する。

「乳首も気持ちよくなるうね」

「あんツ♡ おッ♡ ぐりぐりらめっ♡ すぐイっちゃうからあッ♡」

龍哉さんの太い指が私の乳首をこねこね♡といじったり、ぐりぐり♡と抓ったりする。熱くて硬い指とちんぽの刺激で、もうよだれを気にしている暇もない。革張りのソファは、私のよだれと愛液でてらてらと輝いていた。

「あーすご。利香ちゃんのおまんこ、俺の精子を搾り取ろうってきゅうきゅう♡してるよ。こんな交尾セックス、すぐに赤ちゃんとできちゃうねえ」

「や……っ♡ 赤ちゃんと、らめっ♡ 外に、龍哉さっ♡ あ、ああッ♡」

「利香ちゃんたらまだ諦めてないの？ ダメになるんでしょ？」

「そんなの言ってな……ッお♡ おッ♡ はっ、あ、ッお♡」

「ペットになるっていうことはそういうことだよ、利香ちゃん。本能のまま俺を求めて、おまんこぐちよぐちよにして、子宮に精子を注ぎ込まれるのが仕事なの。だってそれが雄と雌のあり方でしょ？」

「おっ♡ やらあ……ッ♡ んッ♡ あ……ッは♡ おっ♡」

「聞いてる？ 躰が足りないね」

「ッおあ♡」

ぐちゅんッ♡♡

ぎゅうううっ♡

ちんぽを奥に叩きつけられた瞬間、くにくに♡と可愛がられていたはずの乳首を摘ままれ、強く引つ張られた。唐突な強い快感に私の頭の中では火花が飛び散り、気づけば膣はビクビクッ♡と収縮をしていた。

「あゝ乳首イキしちゃった。今のでいくならもう否定できないでしょ、利香ちゃん」

ごちゅッ♡ ごちゅッ♡ ごちゅッ♡

イッたばかりの膣に、龍哉さんの極太ちんぽがまたピストンを激しくさせた。肘の裏から両腕を掴まれて上体を少し反らされると、さっきとはまた違う性感帯に龍哉さんが当たってもう何が何だか分からなくなった。

「あッ♡ おッ♡ らめっ♡ イッ♡ イッた♡ からあッ♡ おッ♡」

「俺もそろそろイキそう……っ。利香ちゃん、奥に出すよ。おじさんの精子全部受け止めてね。ペットならなんて言うのかな？」

「お、おねがいしッ♡ ますっ♡ たつやさんのっ、んッ♡ ごしゅじんさまのっ♡ 精子っ、ください……ッ♡ りかのっ♡ お、おまんこにっ♡ 全部っ♡ くださいッ♡」

「あーやばい。ドスケベ利香ちゃんくる。出すよ、利香ちゃん」

「り、りかもッ♡ イクっ……♡ も、また、おあッ♡」

「あああー……イク、利香ちゃん、利香ちゃん、好きだよ、利香ちゃん……ッ」

「イッ……ッ♡♡♡」

抗えない快感に敗北した瞬間、ぷしゅうつ♡と潮を噴いてしまった。私の中でビクビクッ♡と吐精を続ける龍哉さんは、荒い息のまま私の背中にちゅっ♡ちゅっ♡とキスをしている。

「はあ……ッ　♡　あっ……♡」

「お漏らししちゃったねえ、利香ちゃん」

「んっ、ごめんなさ……ッ　♡　はあ……っ♡」

「いいんだよ。一緒にお風呂も入ろうね」

ずりゅんっ♡と龍哉さんのちんぽが抜かれたと思えば、龍哉さんの手が顔に添えられて私は自然と仰向けになった。龍哉さんは満足そうな顔で笑っている。

「好きだよ、利香ちゃん」

射精をする間際にも伝えられた言葉なのに、その真っ直ぐさに負けて思わず顔が赤くなる。

「え、可愛い。ちゅーしちゃおう」

「わ、ちよ、もう……っ！」

ふざけた調子で龍哉さんはそう言うのと、私に覆い被さって何度も何度も頬や額

や唇にキスをした。さっきまでのご主人様はどこへやらだ。でも、これも彼の手口かも？

(……まあ、もういいか)

きっと私はもう手遅れなのだろう。
懂れてなった職業も、やりがいも、お局も、転職も、快感に溺れて酸欠になった脳の前では、全てがどうでもいいように思えた。

「お湯張りしてくるね」

龍哉さんは最後にちゅううっ♡と私の頬に熱いキスをかますと、ソファから降りていく。浴室に向かうと思いきや一度キッチンに寄って、私のスマホが浸けられたお鍋を持ち上げた。

「こっちも仕上げをしておこう」

やっぱり料理をしているみたいにそう言って、彼は鍋に火をかけた。

やがてそれはグツグツと音を立て、中のスマホを泡で持ち上げてはコツコツと小さな衝突音をも響かせる。

噴きこぼれそうだったからピツとボタンを押して沸騰を終わらせる。煮立った鍋に沈むスマホは、最初から壊れていたみたいな顔をして黙っていた。

「利香ちゃん」

龍哉さんがキッチンに立つ私を見て笑う。

「お風呂鳴ったよ」

そう言って差し伸ばされた大きな手を取った。

いつの間にか自分だけパンツを履いてるから「パンツずるい」と言ったら「脱がせて♡」なんて言われた。私はペットなので、言われるがままにパンツを脱がせた。